

4 新潟市西蒲区角田山沖発見と伝えられる珠洲焼

明治44（1911）年3月16日付新潟新聞に「又々古代土器」と題された記事がある。この記事に掲載されている珠洲焼が新潟市に寄附された。

寄附に至る経緯 平成25年12月21日付新潟日報に掲載された「角田沖から縄文土器」の記事を受け、新潟市江南区在住の齊藤順次氏より当センターに連絡があった。職員が確認したところ珠洲焼の甕と擂鉢であることが判明した。平成26年1月7日付で物品寄附申込書の提出を受け、翌8日付新文セ第232号の3で物品寄附受理通知書を発送し手続きを完了した。

「新潟新聞」の記事 旧字体の漢字は常用漢字に変換し、句読点は適宜付した。（ ）は補足である。

「当市古七（古八の誤り）東新道料理店住の江主人大浦鉄次郎氏実父木戸氏が角田沖の鱈場より揚がりたる古代土器を手に入れしとは既記せしが、尚ほ中蒲原郡曾野木村大字俵柳の素封家小林芳一氏も十年前同地に舟遊の折、図の如き古代土器を網にて得られ爾來何心なく所蔵されしに、今回木戸氏の掘出しが評判となるに連れ、当師範西垣教諭に鑑定を乞はれたるに全く同種のものにて確めたる年代は判明せざるも二千年の古を偲ぶ可きと判明せりと、右に付西垣氏の説明大畧左の如し。

一、大なるものは四斗量も容るるに足り小形のもの又一斗を盛るにたる。

一、小形のものは酒器なるべく大形のものは水甕なるべし。

一、大形の甕の中に図他三器を収め更に海松五尺位に延びたるが生じ居れり。

一、時代は矢張り木戸氏の分に差異なき様認められ形は幾分か異なるところなり。概して木戸氏の方よりは粗製にして無器用なる出来なり。種致は此の方にあると見受けられる。

一、表面は布目にあらずして笊目を表し内面はたたき作りにて凹點を以って覆われたり。

一、色は黒褐色にして厚きは木戸氏の分よりも一層厚き方なり。

一、他三品の内一八後の擂鉢といふ風のものにして曲り形のすりばち形をなし内面には粗なる筋目を付しあり。

一、年代の確かたる見分けに付かずといへども古代土器なることは勿論にして一見二千年の昔をしのばる珍品なり。」

記事の内容を整理すると、古町通八番町東新道にある料理店「住の江」店主大浦鉄次郎氏の父木戸氏が角田沖

の鱈場より引き揚げられた古代土器を入手した。この木戸氏の経緯は明治44年2月17日付新潟新聞「海中より上りし酒甕」の記事にある。木戸氏が入手した古代土器については、坪井正五郎「越後の海底から引上げられた朝鮮土器」〔坪井1911〕に掲載されており、現在でいう須恵器大甕のことである。曾野木村大字俵柳の地主小林芳一氏も明治34年頃に角田沖の鱈場にて甕と擂鉢が網にかかり、何気なく所有していた。木戸氏の土器が話題となつたので、小林氏も新潟師範学校の西垣教諭に鑑定を依頼した。西垣教諭は平安時代の須恵器と鎌倉・室町時代の珠洲焼の区別がつかなかったようだが、箇条書きの説明文には両者の特徴を書いている。図5の小林氏が所有していた焼物のうち、大きさと形状から左端の大甕と右端下の擂鉢が今回寄附された珠洲焼と考えられる。

新潟新聞の記事にある「俵柳の素封家小林芳一氏」とは江戸時代の土地持ち番付にも登場する地主小林家の当主である。小林家は戦後の農地改革により小作地をすべて手放している。齊藤順次氏の祖父は小林家の門番を務めていた。珠洲焼は農地解放後に齊藤順次氏の父が小林家の家財の一部を買い取った際に入手したものだという。

寄附を受けた珠洲焼 寄附された珠洲焼は甕と擂鉢である。珠洲焼は康治2（1143）年頃から15世紀第4四半期頃の鎌倉時代から室町時代にかけて現在の石川県珠洲市周辺で生産された。甕は海路を船によって運搬され、石川県から北海道渡島半島にかけての日本海側を中心に流通した。寄附された珠洲焼も運搬の途中で遭難したものが底引き網に掛かり引き揚げられたものと考えられる。

甕の法量は口径60.0cm・底径19.5cm・器高63.4cm、完形品である。口縁部はやや楕円形に歪む。肩部には笠状工具による「キ」の記号文がみられる。外面は右下がりの平行タタキを体部立ち上がり部まで施す。底部は砂底で外周をナデ調整する。時期は吉岡編年IV2期。

擂鉢の法量は口径30.9cm・底径12.6cm・器高12.2cm、完形品である。体部は直線的に開き、口縁部は外傾する。卸し目は1単位幅3.3cmで7条の入り組み技法である。底部は静止糸切り後、外周をなでつける。時期は吉岡編年II期。時期については珠洲市教育委員会大安尚寿氏より写真を基にコメントいただいた。（相澤裕子）



図5 「新潟新聞」に掲載された図（明治44年3月16日）

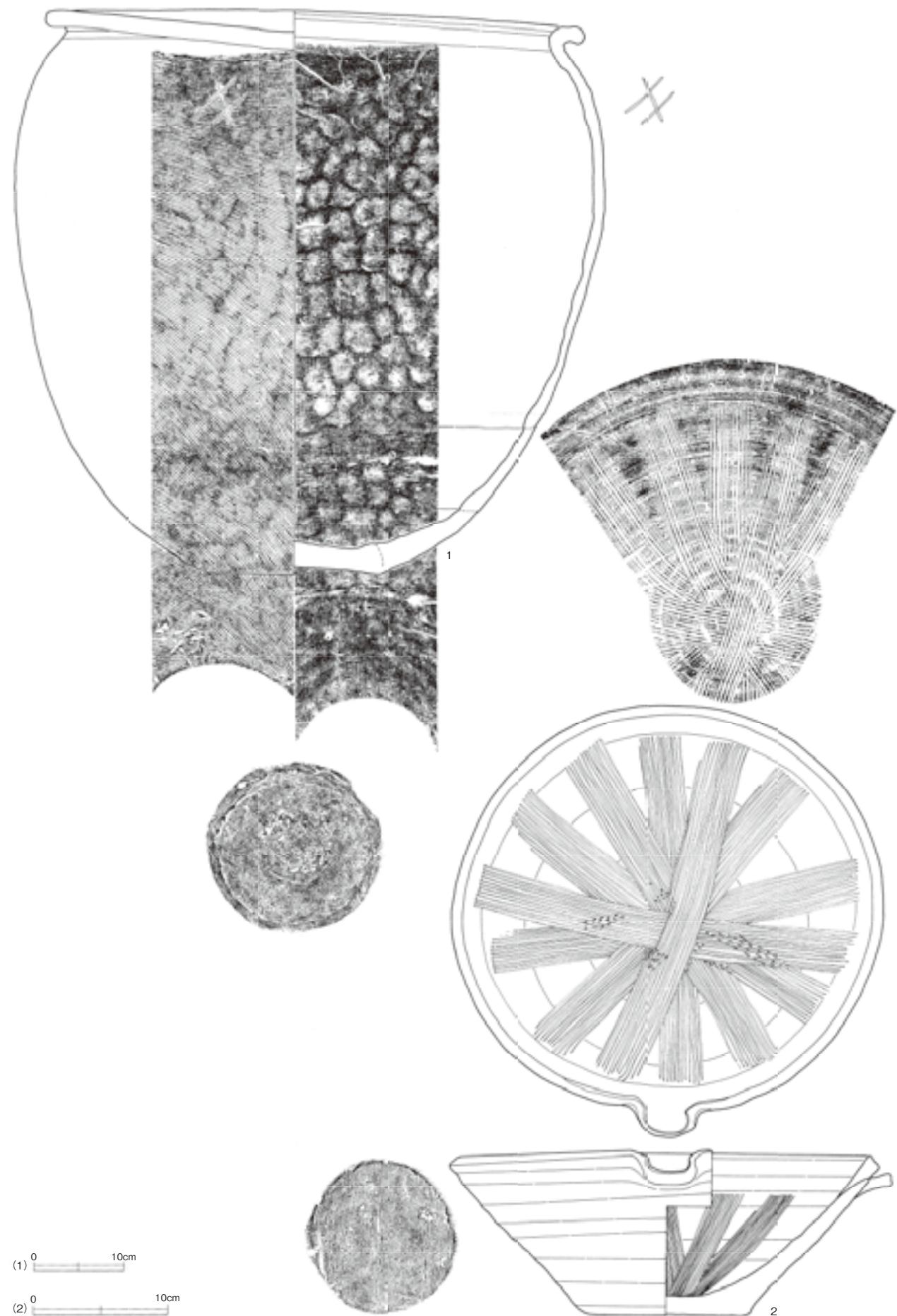


図6 珠洲焼実測図 (1/6、1/4)